

【石の俗称】

ラクダと石

加藤 碩一¹⁾・遠藤 祐二²⁾

1. はじめに

「ラクダ」というと、何を連想するでしょうか。筆者らのような年代ですと(大方の読者と同様昭和時代の生まれですが)、有名な古典落語の1つで五代目古今亭志ん生の得意話でもあったのを思い出します。この話は明治時代に三代目柳家小さんが上方落語の「駱駝の葬礼」を東京に持ち帰ったものです。「ラクダ」というのは、乱暴で図体が大きいので長屋の嫌われ者である主人公(ご存知のように死んでしまっているのですが)のあだ名です。洋の東西を問わずラクダは大きなものの比喩として使われることがあります。また、聖書の中にはラクダ(ここではほとんどヒトコブラクダ)に関する記述が約50回出てくるそうです(誰が数えたのやら)。特に有名なのはイエスが言ったという「金持ちが神の国に入るよりもラクダが針の穴を通る方がまだ易しい」(マタイ伝19章24節他)です(中島, 1999)。これもラクダが大きいものの喩えからきていてその困難さが強調された表現なのでしょう。自慢じゃありませんが、行きたいかどうかは別にして筆者ら貧乏人は

楽々入れますね。モンゴルには「針ほどの穴からラクダほどの風」(「小さなミスが大事を招く」意)とか「ラクダに乗った人は天に近い」とか、やはりラクダの図体の大きさを意味する表現があります。後者は、「経済的な地位があれば社会的な地位があるに等しい」ということだそうです。日本の河内音頭にも「いくら馬鹿でもお金をたんまり持っていりゃ旦那、旦那と人は言う。いくら賢いお方でも貧乏暮らしをしていれば世間の人は馬鹿にする」というのがあります。別に筆者らの家庭内のことではありませんが、やな世の中ですね。

さて、最初から脱線していますが、普通「ラクダ」というと「月の砂漠をはるばると旅の駱駝は行きました・・・」という有名な唱歌が浮かんできますね。この歌は、房総半島東岸中央部付近の千葉県夷隅郡御宿町で作詞家加藤まさを氏が着想を得たもので、それを記念して当地には2頭のラクダ像からなる「月の砂漠記念像」が海岸に建てられています(写真1)。ご覧になった方も多いでしょう。最近、こうした唱歌が小中高の音楽教科書から消えていき、子供におもねった今風の選曲が行われているという嘆かわしい状況は憂慮されます。それはともかく、まあ後述するように善きにつけ悪きにつけもともと日本にいなかったラクダが幕末・明治以降それなりに日本人になじまれてきたことを示しています。もちろん、歴史時代から特に大陸地域では人類と馴染みが深く、さまざまな造形のモチーフとして使われています。中近東地方では、ラクダの家畜化が紀元前4000-1300年ころ中央・南アラビアで行われ、その後アフリカやインドに広がっていくにつれ、ラクダのモチーフが使われていることでその古いなじみぶりがわかります。たとえば紀元前1000年ころの製作と思われるイランのルリスタン出



写真1 「月の砂漠」記念像(千葉県御宿)。

1) 産総研 東北センター
2) 産総研 広報部 地質標本館

キーワード:ラクダ,ラクダ岩,ラクダ石,ラクダ山,ラクダ島,石の俗称

土の青銅製の装飾^{くつわ}嚮はラクダをモチーフとしていますし(岡山市立オリエン特美術館蔵), アラビアのラクダ遊牧民と戦うアッシリア戦士のレリーフやイランのペルセポリス遺跡壁面の使節団に率いられたフタコブラクダレリーフなどもあります。

他の例は唐三彩です。これは、そのほとんど大部分が古代中国の貴族階級の墓に副葬するために焼かれた焼き物で、唐時代の都の西安や洛陽郊外の陵墓からおもに出土します。製作年代は8世紀初めの盛唐の時代です。唐三彩が知られるようになったのは今世紀初めの中国における鉄道建設に伴って洛陽付近の古墳から出土したのが契機です。ヨーロッパ人が“T'ang three colours”と名づけたものの直訳が唐三彩というわけです。鉛を媒熔剤とした低火度の緑・褐・黄色の3種の釉薬を塗りわけていることに由来します。特に馬・ロバ・羊その他いろいろな動物の造形に優れており、この中でも馬とともにラクダの造形はよく知られています(写真2)。それだけに偽物もたいへん多く、騙される人も多いようです。筆者はレプリカと承知でいくつか持っています(値段はとて言えませんが)。

さて、ラクダは「砂漠の舟」と呼ばれることからわかるように砂漠地帯における唯一と言ってもよい輸送手段となる動物でした。ところで、なぜ「砂漠の舟」というのでしょうか。砂漠を海に見立てて比喩的に表現したということは誰でも察しがつきますが、ラクダは歩くとき同じ側面の足を使います。つまり、右前足・右後足を使い、次に左前足・左後足を使うという具合です。この歩き方を側対歩といいます。こうした歩行は必然的に体軀を大きくゆらすこととなりますから、乗り心地は大変悪く慣れないとたまったものではありません。一説にこうしたラクダの歩き方が舟を漕ぐ様子に似ているので「砂漠の舟」と俗称したといいます。ほんとですかね。歩行中だけでなく、乗るときも前足をひざまづいた状態のラクダにまたがって、ラクダが立ち上がったときにバランスを崩して落ちることがあり、これを「落駝」というのは、実にくだらない駄洒落です。もっとも、中国の敦煌近郊に位置する鳴沙山の観光ラクダは、わざとやらせて観光客の受けを狙っているそうです。

さて、さらに、受け売りの蘊蓄をひとつ。英語の almanac は暦・年鑑の意味ですが、この語源にラク



写真2 唐三彩のフタコブラクダ像(出光美術館蔵)。

ダが関係します。この単語は al (定冠詞)、ma (場所を示す接頭辞) と nac からなっています。nac はラクダをひざまづかせるときの掛け声で、一日の終わりをラクダを座らせて終わりとするところから、予定の終わり、暦、記録としての年鑑を意味することとなったそうです(中島, 1999からの孫引き, 朝日百科, 動物たちの地球, 122号63ページ)。

さて、石の世界や地形にもそれなりにラクダが存在します。今回は「ラクダと石」で皆様のごきげんをうかがいましょう。

2. ラクダとその歴史

ラクダは偶蹄目の核脚(ラクダ)亜目ラクダ科ラクダ属に属し、中指と薬指に相当した2指が機能していますが側指は失われています。別に悪さをした誰かさんみたいに指を詰められたわけではありません。進化(退化)の過程です。旧約聖書には「ひづめが分かれ、完全に2つに割れており、しかも反芻する動物は食べることができる。ただし、反芻するだけか、あるいはひづめが分かれただけの動物は食べてはならない(どうしてでしょうかね: 筆者独



写真3 モンゴルのフタコブラクダ(ウランバートル西方)。

白)。ラクダ、野兎、岩狸らは反芻するが、ひづめが分かれていないから汚れたものである」(申命記14章7節)ので、ラクダは食べてはならないとされています。繰り返すまでもなく、ラクダのひづめは分かれており(だから偶蹄目です)、反芻するので食べていいはずですが、論理的に破綻した記述ですね。まあ、宗教に科学を持ち込んだり、家庭に理屈を持ち込んだりするのには野暮というものですが、有名なコブは脂肪の貯蔵組織で、砂漠や乾燥した草原での生活に適応して特殊化したものです。こぶの中身の脂肪は、普通は平均して50キログラム位です。また、こぶは日射しを防ぎ体熱発散にも有効なものです。ご存知のように「ヒトコブラクダ」(学名 *Camelus dromedarius*)と「フタコブラクダ」(学名 *Camelus ferus*)がいますが、ともにラクダ属です。一般に *Camelus* はラクダを意味するラテン語で、その語源をたどるとアラビア語のラクダを意味する *jamel* に由来します。日本語のラクダは、中国名の駱駝に由来し、正しい名は「たぐ駝」でした。たぐ(袋)を背負う獣という意味で、その音が転化したといわれています。「ヒトコブラクダ」は、主に北アフリカから西アジア地方に生息し、現生のラクダ属の93%を占めていますが、すべて家畜種で野生種は絶滅しています。一方「フタコブラクダ」は主に中央アジアに生息しており、家畜種(写真3のモンゴルのラクダ)と野生種があり、両者の間には遺伝子的に3%の差があるそうです。ですから、本来の生息地からみれば、エジプトのピラミッドと写真や絵に表されるのはヒトコブラクダであるべきです。フタコブラクダがいっしょになっているのは観光用に持ち込んだか、よりラクダらしい構図を求めて意図

的または無知から描いたものでしょう。さて、短毛のヒトコブラクダと長毛のフタコブラクダは、生物学的には別種ではなく、ヒトコブラクダも実は皮膚の下にもう1つのコブが伏在しており、両者間の雑種交配も可能なのです。日本の動物園でも何回も試みられました。アリストテレスは、その著書「動物誌」で、「ラクダの肉も乳もあらゆる動物で一番うまい」といっているそうですが、現代人の私たちにとってどうでしょうか。ラクダの足を煮込んだスープはおいしいといわれますが、筆者は飲んだことはありませんので、研究成果と同様よく知らない他分野のことを安直に評価することは控えます。仙台市の地下鉄の「旭丘駅」で下車した駅前商店街の片端に「世界の肉や」と自称する店があります。熊や鹿はもちろん様々な獣肉を売っています。この中にラクダの肉もあります。試したい方はどうぞ。

さて、現生ではラクダが属する偶蹄目は、走ることに適した植物食の有蹄類であり、とくに新第三紀中新世(2千数百万年前～)以降著しく分化発展してきました。この中でラクダはさらに核脚亜目に細分され、脂肪貯蔵のための瘤を持つように特殊化して砂漠や乾燥した草原での生活に適応してきたのです。

さて、その先祖を尋ねると、約4,000万年前の新生代古第三紀の後期始新世に遡ります。ウマ類と同様に北アメリカに起源し、化石種としてはプロティロプス *Protylopus* が代表で50cmほどの大きさでしたが、現生のラクダの直接の祖先型としてはやや疑問です。新生代古第三紀中期漸新世にはすでにラクダ体型となっており、大きさも80から90cmほどになりました。代表例はポエブロテリウム *Poebrotherium* で、すでに側指は失われています。これから様々なラクダ科が放散進化していったようです。約1,000万年前の中新世の後期には最盛期を迎えました。本命はプロカメルス *Procamelus* で現生のラクダ(カメルス)の直接の祖先ないしそれに近いと考えられています。全長1.5mに達していました。この他キリンやガゼルに似たラクダも出現しましたが、進化の袋小路に消えていきました。約500万年前の鮮新世以降には大型のラクダが多く出現し、陸橋を経由して旧大陸と南アメリカに放散移住していきます。この時期は、北米大陸は比較的安定した環境下にあり、コブに脂



写真4 トルコの観光用ラクダ。

肪を貯蔵する必然性もなかったためかコブはありませんでした。いわゆるキャメルは、更新世(約180万年前～約1万年前)には北米、アジア、北アフリカ、ヨーロッパと広く分布するようになりました。現在ではアジア大陸の一部～中近東～北アフリカに棲息しています(写真3および4)。しかし、更新世の最末期の約12,000年前ころには本家本元の北アメリカでは絶滅してしまいます。このころ人類が北米に移住したことは暗示的です。オーストラリアにはもともとラクダはいなかったのに、今見られるラクダはアラビアから人間が持ち込んだものです。その一部が野生化しており(したがって野生種ではありません)、さらにそれを捕獲してインドに輸出させているそうです。これは、ヒトコブラクダです。ラクダもたくましいのですが、人間の商魂もまたたくましいものがあります。近年、最もラクダの多い国はソマリアで610万頭以上いてほぼ人口に等しいそうです。

3. ラクダの渡来

日本に初めてラクダが渡来した記録は、日本書紀にあるように推古七(599)年のことで韓半島の百済からでした。その後も韓半島を経て、推古二十六(618)年に高麗から(続日本書紀)、斎明三(657)年に百済から(日本書紀)、天武八(679)年に新羅からと続きました。いずれも原産地は西アジアで当然フタコブラクダでした。渡来してからどうなったのかは今となってはだれにもわかりません。もちろんとくに死んでいます。その後は1,000年以上も記録にないだけなのか、実際に渡来しなかったのか

第1表 江戸時代における日本へのラクダ渡航(磯野・内田, 1992)。

1803(享和3)年	オランダ船フタコブラクダを持ち渡すが、これが実はアメリカ船だったため、当時オランダ・中国以外と鎖国していた江戸幕府は受け取らなかった(甲子夜話)。
1821(文政4)年	オランダからヒトコブラクダの雌雄渡来(通航一覧)、幕府は「御用無し」と返答したが、民間の手に渡り見世物となる。
1823(文政6)年	7～8月大坂難波、9月京都で見世物(長崎志/見世物研究)。
1824(文政7)年	閏8月～翌年春にかけて江戸両国で見世物となり、その後東国に回る(甲子夜話)。
1826(文政9)年	北陸を経て名古屋・三河・遠江で見世物(猿猴庵日記)。
1827(文政10)年	再度名古屋・大坂に回り、次いで北国へ回る。巡回中に死亡した(猿猴庵日記)。このラクダ巡回は大いに評判となり、ラクダの版画・引き札・著書はもちろん玩具、雛人形、凧、水入れ、双六などの便乗商品が横行した。
1863(文久3)年	フタコブラクダ1頭横浜に渡来、両国で見世物(武江年表)。
1867(慶応3)年	フタコブラクダ大坂で見世物。

定かではありませんが、江戸時代以降には再び記録されています(第1表)。享和三(1803)年に長崎に入港したオランダ船がフタコブラクダ1頭の献上を願い出て京・大坂・江戸でうわさになりましたが、実はアメリカ船だとわかり、幕府は受け取りを拒否したため、持ち帰られてしまい日本人の目には触れませんでした。文政四(1821)年に、オランダ船がサウジアラビアのメッカ産(イラン産とする説もある)の雌雄2頭(雄は5才、雌は4才)のヒトコブラクダを舶載してきました(第1図)。時の長崎奉行間宮筑前守が見物し、長崎出島のオランダ商館長ブロムホフが将軍家斉に献上しようとしたことが「御用無し」と返答されました。そこで、ブロムホフは、寵愛していた遊女の糸萩にあたえました(通詞に贈呈したとの説もある)。文政六(1823)年、ブロムホフ帰国後に糸萩はつきあっていた男に請われラクダを手放しました。その後、ラクダは長崎商人を経て香具師の手にわたり、各地で見世物となりました。最後に、北国巡回中に死んだそうです。当時は、今でいえばラクダ・グッズともいえるべき多くのラクダを表した版画、引き札、玩具、凧、雛人形、双六、水入れなどが便乗して売り出されました。当時の著



第1図 文政四(1821)年渡来のラクダを記した瓦版(稲垣, 1995より).

名な画家達も写生を残しています。京都の丸山応震、江戸の谷 文晁や仙台の菊田伊徳などです。もっとも背景は、無地のままでした。見たことも無かったラクダの生息環境などは想像もできなかったためでしょう。文久三(1863)年にはフタコブラクダが横浜に渡来し、江戸両国で見世物になりました。さらに、慶応三(1867)年にも大坂でフタコブラクダの見世物ができました(磯野・内田, 1992)。現在では各地の動物園で見られる人気者の1つです。

4. ラクダ岩・ラクダ石

ラクダの形状に因んで「ラクダ石・岩」や「ラクダ山・島」などの地形が世界各地にあります。なんとといってもラクダの形の特徴である背中のコブに似た形に由来します。

まず最初に、秀逸なトルコの「ラクダ岩」を紹介しましょう。トルコの位置するアナトリア半島中部のカップドキアの中心都市の1つであるウルギュップの東方、カイセリの南方にエルジエス山が位置します。基部の直径約30km、高さ3,916mで、中部

アナトリアで最高かつ最大の複合火山で、中央火口丘と多くの二次的な側火山群からなっています。主に安山岩溶岩や火砕物及び少量の玄武岩からなっています。ウルギュップ周辺の凝灰岩は、斜長石や黒雲母の破片を含む石灰質の固結された堆積物で、しばしば単斜輝石や曹灰長石を含むかんらん石玄武岩溶岩に覆われています。厚さは300～350mに達します。カップドキアの南西方のハッサン山や周辺の火山群も同様で、これらの噴出物が侵食によって有名な独特のキノコ状地形を呈しています(加藤, 2004参照)。これらの噴火時期はあまり詳しくわかっていませんが、新生代新第三紀中新世後期以降です。エルジエス山の側火山群の最後期の噴火活動(火や噴煙が立ち上る)が記録されているようですが、本当でしょうか。ハッサン山の活動はエルジエス山のそれよりやや若いと見られています。大方は約300万年前の新第三紀鮮新世の噴火による噴出物とみなされています。大部分凝灰角礫岩からなっています。カップドキアに人が居住し始めたのは紀元前8000年頃で、岩窟を住居化したのは紀元前4000年頃でした。紀



写真5 トルコのラクダ岩(カッパドキア)。



写真7 中国のラクダ岩(桂林七星公園)。



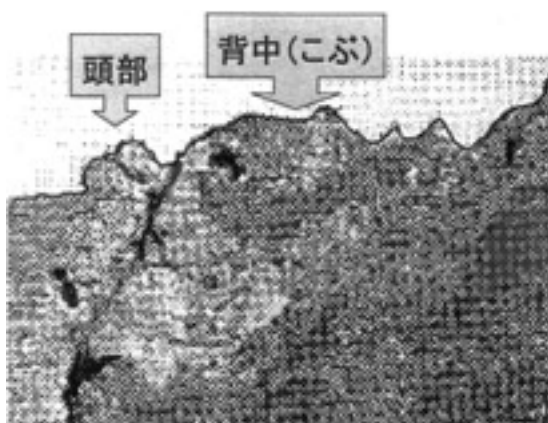
写真6 トルコのラクダ岩(写真5の反対側)。

元前1900年頃にはアッシリア人によって構築された交易網の拠点の1つとして繁栄しました。その後、4世紀には中心部のギョレメ渓谷にキリスト教徒が地下都市始め岩窟を利用した教会等を造り住みつけました。17世紀には6万人も生活していた地下都市となっていたといえます。空気孔などそれなりに工夫はされていますが、閉所恐怖症の人には無理ですね。筆者の一人(加藤)は、1982年と2000年に訪れましたが、当然と言えば当然ですが、あまりに観光地化されているのには驚きました。気球に乗って空から探訪するツアーさえあるのです。さて、おませ「ラクダ岩」です(写真5・6)。ゼルベ地区へ向かう途中、デレVENT・バレー沿いの道路から見えます。前から後ろからどうぞ。ほんとによくできています。このあたりの黒い層は遠目には玄

武岩溶岩かと思いましたが、実際に見てみると白色の部分と同様の凝灰角礫岩でした。それでも侵食に対して差異があるためです。

アジアにも立派な「ラクダ岩」があります。中国の桂林市は、広西チワン族自治区東北部に位置し、中国名で、「桂」が「金木犀」を意味することに由来するそうです。市内には、約30万本あるということです。歴史は紀元前214年の秦の時代にさかのぼり、都市としては漢の時代に本格的に建設されました。中国でもトップクラスの観光地です。宋代の詩人が「桂林山水甲天下」(桂林の景色は天下第一)と表現しています。市内にある観光名所である「七星公園」の名は、園内に点在する7つの岩山である「七星岩」に由来します。中国三大河川の1つである珠江の支流である漓江のそのまた支流である東江に架かる花橋を渡ったところにあります。この「ラクダ岩」は、古生代の石灰岩の侵食地形です(写真7)。なかなか雄大なものです。

トルコと中国の例を紹介しましたが、そのほかの外国にも当然あるでしょう。ロシアのカムチャッカ半島部のペトロパブロフスクに程近い活火山であるアバチャ火山(アバチンスカヤ)(2,741m)とコリヤカスカヤ火山(3,450m)の鞍部に位置するフタコブ状の岩山が「ラクダ山」と呼ばれているそうです(ロシア語でなんとというか知りませんが)。安山岩質の溶岩ドームが風化侵食を受けたものです。ヨルダンのペトラ遺跡(「ペトラ」はギリシャ語で「岩」の意)付近にはフタコブラクダ状の岩がありますし、アメリカの40号線をアコマへ向けていく途中にも「ラクダ岩」(もちろん現地では「キャメル・ロック」です)、モニュメントバレーやコロラド・スプリングス



第2図 北海道の「ラクダ岩」イメージ図(上川郡朝日町)。

の西のガーデンオブザゴッドにもあるそうです。アフリカ北東部のチュニジアにも巨大な丘陵状の「ラクダ岩」があるそうです。いずれも行ったことが無いので詳細は不明です。またまた読者だのみです。行ったことがある人は教えてくださいと横着をきめ込みます。

さて、もちろん日本にもあります。北からいくつか紹介しましょう。

5万分の1「上川」図幅内に位置する北海道上川支庁上川郡朝日町と網走支庁紋別郡滝上町境界付近に「ラクダ岩」があります。地図に名前が出ています(E142°52', N43°58')。天塩川上流の手塩岳(1,557.6m)北方約1kmの前手塩岳(1,540m)との間に位置します。岩内川から手塩岳にかけて広く分布して、山体部を構成する新第三紀中新世のデイサイト質プロピライト(変朽安山岩：ここでは石英を含む安山岩が熱水変質したもの)からなっています。これは、一般に灰色から緑灰色でときに暗灰色を呈する堅硬な岩質ですが、一部角礫質で板状節理が発達する部分もあります。顕微鏡下では石英・斜長石・普通輝石・紫蘇輝石・黒雲母の他少量の角閃石が観察されます(藤原ほか, 1970)。これも1種の侵食地形です(第2図)。首と背中との境目に亀裂が入っており、なんとなくヒトコブラクダ状を呈しています。

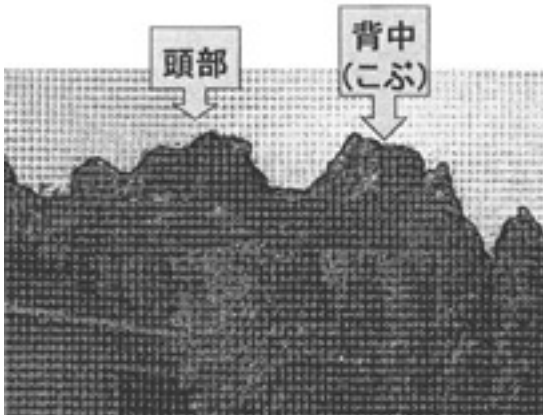
愛知県には東海自然歩道が整備されており、その1つが浜名湖の西に位置し、静岡県との県境を南北に走る「湖西連峰」の神石山自然歩道です。その途中に「ラクダ岩」があります。なんとなく似ているという感じです。付近はいわゆる秩父系の古生



写真8 ラクダ岩(和歌山県日高郡南部町)。

代二疊紀(～一部石炭紀)の砂岩・泥岩・チャートなどの堆積岩を主としますが、詳細な時代については再考が必要です。また、木曾川の下流部は、地理学の祖といわれた志賀重昂によって「日本のライン川」と称された景勝地です。この流域に分布するのは中生代初期のチャートで、約2億2,000万年～1億9,000万年前くらいに現在の太平洋に相当する深海底に堆積したものです。これが侵食されて「亀岩」「ライオン岩」「メガネ岩」「夫婦岩」などの様々な奇岩があちこちに見られ、その1つに「ラクダ岩」があります。残念なことに日本ラインくだけは現在休業中で、直接見ることはできません。いつか再開される日を待ちましょう。

紀伊半島の西岸、JR南部駅といわしる駅の間の日高郡南部町山内大目津付近の海岸は、侵食で入り組んだ海岸線を呈していますが、地質学的には北縁を御坊-萩構造線、南縁を本宮断層の画された音無川帯という東西性の帯状地質区の西端に位置します。これを構成する音無川層群は、泥岩・砂岩やそれらの互層などの碎屑岩からなり、全層厚は、1,800m以上あります。詳細な時代は不明ですが、化石から古第三紀前期始新世の可能性が示唆されています。ざっと5,000万年ぐらい前というところでしょうか。ここに、「ラクダ岩」があります(写真8)。基部は海面下に没して島状を呈します。首から頭部にあたる部分は砂岩中の泥岩塊が侵食されてへっこんでいますが、背中(こぶ)はあまり明瞭ではありません。周辺は、釣りのメッカで、釣り人たちがつけた愛称なのでしょう。あまり歴史的ないわれはなさそうです。



第3図 大分県の「ラクダ岩」イメージ図(大野郡緒方町)。

次は四国に行きましょう。四国88ヶ所の霊場のうち第32番が高知県南国市にある八葉山求聞寺禪師峰寺ぜんじぶつじです。峰山の上にあるのでみねんじとして地元で親しまれています。奈良時代の名僧行基が海上安全を祈念して小堂を建てたことに始まり、その後弘法大師が、大同二(807)年に訪れ修行したところでもあります。大師の刻んだという十一面観音像が本尊となっています。山門から本道へ向かう参道両側には、様々な奇岩があり、その1つが「ラクダ岩」です。他にもくぼみにたまった水が潮の干満に呼応して増減するという「汐ノ干満岩」、さらに「メガネ岩」「ゴジラ岩」「屏風岩」などもあります。周辺は、四万十帯に属する砂岩泥岩とその互層を中心とする白亜紀の地層と考えられるようになっています。

次は九州です。大分県大野郡緒方町と宮崎県西臼杵郡高千穂町の境界をなす稜線上に位置する祖母山(1,756m)は、深田久弥選の「日本百名山」の96番目にあたります。この南に位置する障子岳との間に「天狗岩」や「烏帽子岩」があり、25,000分の1地形図「祖母山」にも載っています。さて、地図には載っていませんが、「烏帽子岩」と障子岳の間の東に張り出す支尾根に「ラクダ岩」があります(第3図)。祖母山付近に分布する祖母山火山岩類は、新第三紀中新世に大量の火砕物を噴出後、その中央部が円状に陥没しさらに火山岩類に埋積されたもので、祖母山コールドロンとも呼ばれます。4回の火山活動が識別されており、流紋岩・デイサイト・安山岩質の火砕岩類からなっています。これらが侵食されてヒトコブラクダ状の岩峰をなしている

のです。東方には、「ラクダのテールリッジ」と呼ばれる尾根が張り出しています。

もう少し小さいのは「ラクダ石」と称されます。たとえば、山梨県甲府市内を貫流する笛吹川の支流荒川上流部の渓谷である御岳昇仙峡には、様々な名称を付された岩塊があります。その1つに「ラクダ石」があります。御岳昇仙峡は、南北4~5km、東西3~4kmのほぼ楕円体状をなす新第三紀中新世の黒雲母花崗岩からなり、その節理に沿った侵食風化によって形成されたものです。

また、静岡県志太郡岡部町の笹川八十八石ハイキングコースを笹川沿いに登って行くと、様々な名称の岩塊がありますが、その1つに「ラクダ石」というのがあるそうです。この付近は古第三紀の瀬戸川層群の堆積岩類が分布しています。「ラクダ岩」「ラクダ石」も岩質は様々です。

5. ラクダの地形

コブ状の峰を持ちラクダのような山形といわれる山はあちこちにあります。前述した桂林の「ラクダ岩」も「ラクダ山」とも称されます。日本でも、たとえば、北海道樺戸郡新十津川町と石狩郡当別町境界をなす稜線上にあるピンネシリ(1,100m)とマチネシリ(待根山, 1,002m)も、地元ではフタコブラクダのような山と呼ばれています。アイヌ語では、前者は男山、後者は女山という意味だそうです。この基盤は中生代白亜紀前期ないしそれ以前の隈根尻層群の粘板岩で、それを貫く火成岩岩脈(岩質は、はんれい岩・輝緑岩・ひん岩)が侵食されて残ったものなのです。

この他、地図には記されていませんが、群馬県利根郡月夜野町南部の利根川西岸に位置する山は、その形から地元で「ひょうたん山」または「ラクダ山」と呼ばれています。第四紀の輝石安山岩の溶岩や火砕岩からなる侵食地形です。

しかし、地形図上で「らくだ山」と明記されている山は熊本県阿蘇郡高森町の「らくだ山」ぐらいでしょう(25,000分の1「高森」, E131°08', N32°49')。この山が位置する九州の阿蘇火山は、日本最大のカルデラで有名です。東西約18km、南北約25kmで面積は380km²に達します。新第三紀末から第四紀前半(ここでは220万年前から40万年



第4図 阿蘇火山の「らくだ山」近傍の地質図(小野・渡辺, 1985より)。

前くらい)の先阿蘇火山岩類の噴出を主とする火山活動によって山体が形成されました。いわゆる阿蘇火山自体は約30万年前から始まった火山活動によってカルデラが形成され、今も中央火口丘で活動が続いています。現在では、先阿蘇火山岩類は、カルデラ壁や周辺地域に一部分布しているだけです。これらが分布するカルデラ壁東南縁に「らくだ山」(駱駝山公園)という地名があります。やや低い頭部に相当する山峰部とその後ろのやや高いひとこぶ状の山塊をラクダに見立てた侵食地形です。岩質は、玄武岩火砕岩で、火山角礫岩や凝灰集塊岩からなり溶岩流を伴います(第4図)。

山にラクダ地形があれば、例によって当然(かどうか知りませんが)海にもあります。紀伊半島南端に近い東岸部の和歌山県牟婁郡那智勝浦町の海岸付近は、「紀の松島」といわれる景勝地です。周囲17kmの海域に大小の島々が分布しています。新第三紀中期中新世初頭の熊野層群下里累層の



写真9 ラクダ島(和歌山県勝浦)。

砂岩泥岩互層が分布し、中新世中期の熊野酸性火成岩類の貫入を受けています。千畳敷を構成する熊野層群敷屋累層がこれを整合に覆います。写真9の「ラクダ島」(「ラクダ岩」とも呼ばれます)は熊野酸性火成岩類の岩脈です。海面上の岩塊は、まさにヒトコブラクダ状で、特に首～頭部はよく似ています。付近の勝浦温泉には船で行く露天風呂「らくだの湯」もあります。観光人気スポットの1つでご覧になった方も多いでしょう。

書き続けるのもラクダというわけでもなく(読み続けるのもラクダというわけでもないでしょうが)、それでは、今回はこの辺で。

参考文献

藤原哲夫・金 祐・松井公平・庄谷幸夫(1970): 5万分の1地質図幅「上川」及び同説明書(25p.), 北海道開発庁。
 稲垣史生(1995): 江戸の大変<天の巻>, 平凡社, 111p。
 磯野直秀・内田康夫(1992): 舶来鳥獣図誌-唐蘭船持渡鳥獣之図と外国産鳥之図-, 八坂書房, 143p。
 加藤碩一(2004): みちのく石便り(その3), 地質ニュース, no.400, 53-61。
 中島路可(1999): ポピュラー・サイエンス202, 聖書の中の科学, 裳華房, 204p。
 小野晃司・渡辺一徳(1985): 阿蘇火山地質図(5万分の1), 火山地質図4, 地質調査所。

KATO Hirokazu and ENDO Yuji (2004): Stones named after camel.

<受付: 2004年5月28日>